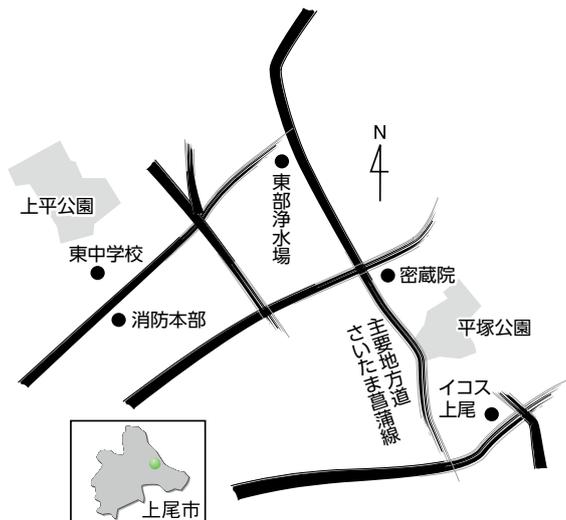




写真2 日光・月光菩薩立像



## 市内最古の仏像 日光・月光菩薩立像

上尾市内で確認されている最古の仏像は、平塚の密蔵院(写真1)境内にある薬師堂の日光・月光菩薩立像である(写真2)。平安時代後期の作と推定され、薬師堂の本尊である薬師如来立像の脇侍として安置されている。脇侍は主尊である如来を補佐するとされ、主尊の左右に一体ずつ置かれることが多い。このような計3体の組み合わせを三尊形式といい、密蔵院では薬師三尊を構成している。また、菩薩を守護する十二神将立像も堂内に安置されている。中平塚の『安藤家文書』によると、日光・月光菩薩と十二神将立像は、奥州磐城平藩の内藤家の持仏として江戸に伝来し、安永四(1775)年頃に江戸から現在の場所に移されたものと伝わっている。薬師如来は秘仏とされ、寅年の3月に御開帳が行われる(次回は2022年予定)。

菩薩像にはさまざまな形式があるが、左右の脇侍の姿形が似ていることが多く、密蔵院においても同様である。しかし平成六年に行われた調査によって、密蔵院の日光・月光菩薩の像造技法や表現様式に違いがあることが確認された。

日光菩薩はカヤを使い、一本の木を彫る「一本造」という技法で造られている。これに対し月光菩薩はヒノキを使い、複数の木材を寄せ合わせる「寄木造」という技法で造られている。一本造は奈良時代後期から平安時代



写真1 密蔵院求聞寺本堂(右)と薬師堂(左)

前期にかけて盛行した技法で、寄木造りは平安時代後期に完成された技法である。また眼の表現方法は日光菩薩が木を彫り出す「彫眼」であるのに対し、月光菩薩は水晶の眼をはめ込む「玉眼」が採用されている。玉眼は寄木造が普及して一般化した技法として知られている。その他にも、衣文や体などの表現に違いが見られる。

これらのことから日光菩薩が十一世紀頃、月光菩薩が十二世紀頃の製作と推定される。製作者は明らかではないが同時期の東日本の仏像には類例があまりなく、西日本の仏師によるものと考えられる。実際に上尾市内の仏像に記された銘文を見てみると、1800年頃までに造られた仏像は大半が京都の仏師によるものであった。その後仏教信仰の広がりに伴い、市内各地の寺院や堂庵の本尊として上尾近隣の仏師によって仏像が造られることとなった。

(上尾市生涯学習課)

## コラム column

### 仏像の銘文と仏師

上尾市内には、仏像や神像などの彫像が670余り確認されており、そのうち82の像に銘文が記されている。

仏像の銘文によると大半が江戸時代以降に製作されており、1,600年代の像は京都の仏師によって製作されたものである(写真3)。中には「法橋」の称号を持つ仏師によって造られた像もあることが銘文により分かる。

法橋は法橋上人位のこと、僧の称号である。当初は僧に与えられたが、平安時代後期以降は実績のある仏師や医師・絵師などにも付与された。一流の仏師によって造られた仏

像が市内にも伝わっていることが分かる。

1,700年代になると江戸小石川大塚坂下(文京区)・幸手・忍領袋村(鴻巣市)在住の仏師による仏像や、京都の仏師銘のある仏像が現れる。

そして1,800年代には京都の仏師銘は見られなくなり、川越・栢間村(久喜市)・忍領新郷村(羽生市)など上尾近隣の仏師の仏像が目立つようになる。

このように仏像の銘文には、製作年代や仏像の製作地、仏師の活動状況など多くの情報が含まれている。



写真3 銘文の一例  
延宝8(1680)年に、京都在住の法橋の称号を持つ院達によって製作されたことが記されている。